灰色蝶にウロボロス

初瀬こより

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
灰色蝶にウロボロス

【Ｎコード】
Ｎ７９５４Ｗ

【作者名】
初瀬こより

【あらすじ】
高校の入学式、私はひとりの見知らぬ男子と出会った。そして唐突に生じる見知らぬ光景。それは有り体に言うなら前世というやつで、見知らぬ男子は前世でよく知っていたはずの相手だった。それがどんな関係だったのかすらわからないけれど、私と彼は前世という共有できる過去があるということは確かだった。この日の彼との出会いが予め定められたことだったのなら、誰が何のためにそう定めたんだろう？　まぁ大した理由なんてないだろうけど。だって私と奴とのことだし。甘さも苦さも特にない、ただなるようになった

程度のことでしかないだろう。

プロローグ

高校の入学式の日、クラス分けの掲示の前、私は彼を見つけた。
同じブレザーの制服を着た同じ年齢の同じような男女が行き交う中、まるで彼と私だけが違う次元にいるんじゃないかというくらいはっきりと互いの存在だけが感じ取れた。
そして唐突に、今までまったく知らなかった光景が脳裏によぎる。一瞬にしていくつもの記憶が私の中に生じる。
見たこともない光景は見たことがある。
知らなかったことは知っていたことだ。
矛盾する自身の思考を遮るように目を閉じて、ゆっくりと深呼吸をして目を開ければ不思議なくらいすんなりと私は今しがた私の中に生じた光景を記憶を、全部現実として受け入れていた。
彼は少し離れた場所から私を見ていた。
それはまるで見たことのない顔だ。間違いなく初対面のはずの相手だ。
でも私は彼を知っている。
ここで私達が出会うことは決められたことだった。
そんな夢想じみたことを、私の脳は既に疑いようもない事実として理解していた。
ただ呆然とそこに立ち尽くす私のほうへ彼は歩いてきた。そして目の前で立ち止まると笑った。
「久しぶり？」
えらく楽しげな彼を前にして、またいくつかの事実が私の中に生じる。
だから私は答える。
「久しぶりと言うのは何だか違和感があるよ」
すると彼は言う。
「確かに久しぶりと言うような言わないような？　まぁ一応今回初

めまして、か。うん、一応礼儀として初めましてと言っておこう。
俺は限野冬季（かぎりのふゆき）。そちらさんの名前を聞いても？」
彼、限野は右手を差し出してきた。
私もそれに応え、彼の右手を握り返した。
「一応初めまして。私は一宮棗（いちみやなつめ）」
握り返した彼の手は熱くも冷たくもなかった。代わりに奇妙な感覚はあった。
それは彼も同じだったのだろう。不思議そうな顔で、離した自分の右手をしげしげと見ている。
「ああ、うん。そうだな、こんな感じか」
「何だか変な感じ」
「そう、変で異常だ。あり得ないはずだから」
ひとり納得するように頷いて、彼はクラス分けの掲示へと目をやった。
「クラスは別か。まぁこんなもんだろう。それじゃあ俺はもう行くから。またな」
私の言葉など何一つ待たず、彼はその他大勢の新入生の群れの中へと紛れて行った。
しばらくしてから私もその雑踏の一部となった。？

1話

高校に入学してもうじき一ヶ月。
少しずつ新しい生活にも慣れ始めた頃のとある放課後。
「一宮は意外に神経質だよな」
彼こと限野冬季は最新機種のスマートフォンをいじりながら言った。
「意外ってどういう意味？」
声のトーンを低くして、私より少しばかり視界が高い限野を睨みつけてやったけれど、意外に図太い彼はそんなことはまるで意にも介さない。ディスプレイから顔を上げることもなく、笑って返してきた。
「想像と違ったってことだ」
どんな想像をしていたのか問い詰めたいところだったけれど、ここは一応公共の場、電車の中だ。大声を出したり揉め事を起こすのはよくない。周囲のお客様に迷惑だ。
一応分別というものを持ち合わせている私はとりあえず不満をぐっと飲み込み、吊革に掴まり直した。
放課後、私と限野は特にどちらから言い出したわけでもなく一緒に帰宅するようになっていた。自宅の方向が同じで、同じ沿線を遣う友達もいないので何となく二人でとりとめもない話をしながら電車に揺られ、時折乗換駅の中のカフェでお茶をしたりする。
限野は新入生総代を務め、ついでに某有力政治家の縁戚にあたるとかで、何かと学内の話題をかっさらっている存在だ。そのため偶然それを同級生に目撃され、不本意ながら付き合っているのかと聞かれたりすることもあるのだが、そんな青春の甘酸っぱさなどどこにもない。
私と限野が話すのはいわば確認作業の一環だ。お互いがどこまで共有できているのかを知るための。

入学式の日、私の中唐突に湧いていくつかの事実という名の記憶。断片的な上にそれが確かな記憶だという確証もないのだけど、確信したこともいくつかあった。
それは、私と限野の間には引力めいた何かがあるということ。
私は私になる前、今は限野冬季という名前の彼と浅からぬ縁があったということ。
私の中に突如湧きだした未知の記憶は、限野と共有できるということ。
入学して一週間程経った下校途中。駅で出くわしたついでに以上三項を話すと、限野は心底呆れたような顔をした。
「つまりほとんどわかってないってことか」
「ほとんどなの？」
全体像が掴めないから今現在私が把握している事実は、事実の内のほとんどなのか僅かなのかどうなのかすら自分では判別がつかない。
「ほとんど。もう全然だ」
限野がわざとらしく肩を落とす。何だかバカにされているようでムカついたから出来るだけ高圧的に返した。
「じゃあ限野が全部教えてよ」
「それは嫌だ」
即答。
限野冬季は嫌な奴だ。私も大概性格がいいとは思わないけれど、こいつも相当だ。
「まぁそのうち思い出すだろうよ。俺と一宮は既に接点を持っているんだからな。このまま一宮ひとりが何も分からないなんてあるわけがない」
どういう理屈だとつっこみたくなるような言い分だが、まぁ確かに私もそういう気はするから黙っておいた。
放っておけば知るべきことは知るだろう。このまま何もないなど、ありえるわけがないと、そう確信している。

その確信の根拠が何なのかなどわからないけれど限野もそう言い、私もそう思うのだからそうに違いないのだ。私達の場合は。

帰宅して夕食を食べ終わり、自室で一人くつろぎながら今現在わかっている事実を整理してみることにした。限野いわくの、私はほとんどわかっていないという私と限野に共通する事実を。

限野と私の縁は私たちがそれぞれ一宮棗、限野冬季として生まれる以前、いわゆる前世というやつからのものだ。それは間違いない。

あの日私の中に生じた、見知らぬ風景と人々。資料や絵でしか見たことがないような時代がかった服装の人々。それは間違いなく私が一宮桐葉として生まれる以前に経験した記憶だ。そしてその記憶を限野も持っている。

前世での私がどういった人間だったのか、限野とどういった関係だったのかまではわからないけれど。そして私達の縁が確かなものだったという物的証明も何一つない。けれど私達がそうだと思うのならそれこそが最大の証明だと私は、そして恐らく限野もそう思っている。

ここまで考えて、妙なことだと今さらながら思った。

突然湧き出た見知らぬ記憶は前世の記憶で、出会ったばかりの人間とは前世での縁があった。

こんなこと誰に話したって到底信じてはもらえないだろう。思春期にありがちの思い込みと笑われるか、頭がおかしくなったと思われるのがオチだ。

あの入学式の日までは私だって前世なんてこれっぽちも信じていなかったし、運命だとか必然だとかいう言葉はロマンチストのためのもので自分には一生縁がないと思っていたのに。

だけど少なくとも私にとってこれは現実なのだ。会ったこともないアメリカ大統領だとかハリウッドスターだとか芸能人だとかより、私にとってはよほどリアリティがある。

もしかしたら自分の頭がおかしくなったんじゃないか、と少し不

安にならないでもないけれど。
「でも客観的にいったら、どう見てもおかしいのは私の頭だよなぁ」
そうだったら嫌だなと思いながらベッドに寝転がって天上を見上げた。
柔らかい羽毛布団に寝慣れた枕の感触。白い天井に取り付けられたルームライトが室内を明るく照らす。一階のリビングからは両親が聴いているらしいオペラが聴こえてくる。
現実と幻想の境界はどこにあるんだろう。
この手で触れて、この目で見て、この耳で聞いて。五感以外で感じたものは現実とは言わないのか。科学で証明できる物以外は非現実なのか。
ああ、いつだったかもこんなことを延々と考えた気がする。
でも算数のように正しい一つだけの答えなんかでるわけがない。
だから私は――……。

翌日、あのまま寝入ってしまった私は見事に寝坊し、遅刻寸前で学校に辿りついた。
あんな実のないことを考えて、その上考え疲れて寝過ごしただなんて我ながら本当にバカだ。
「おはよう、一宮さん。さっき限野くんが呼びに来たよ？」
「限野が？」
隣の席の女子のその言葉にうんざりとした気持ちになる。いや、親切に教えてくれた彼女には何の罪もないのだとわかってはいるのだけど。
「その時伝言を預かったよ。『電話に出るかメールを返せ』だって。相変わらず仲良しだね」
彼女が何をもって私達を仲良しと思っているのかは知らないが、とりあえず曖昧に笑っておいた。
そう言えば一応現代高校生らしく、限野とは携帯の番号とメール

アドレスを交換しておいたんだった。普段からそれほどメールも電話もしない私には残念ながら頻繁に携帯をチェックするという習慣がなくて、友達はおろか家族にまでもう少し若者らしく携帯電話を使ってもいいんじゃないかと言われるありさまだ。

ブレザーのポケットから携帯を取り出すと、不在着信と新着メールが入っていた。マナーモードにしたままだったので全然気付かなかった。幸い、不在着信もメールも限野からだけだったので他の人間には迷惑をかけていないらしい。

けれど限野が電話にメールとは一体何の用だろう。この一ヶ月、かなり濃い交流をしてきたとは思うけれど、お互い電話もメールもしたことはない。いつも直接顔を合わせての会話だったのに。とりあえずメールを開いてみると、『放課後、屋上』とだけ書かれていた。シンプルにもほどがある。電報か。

つまり放課後屋上に来いという意味なのだろうが、人の予定も聞かないで一体何様なのか。帰宅部だから部活もないし特に用事も入っていないけれど。まぁあいつはそういう人間なのだから何を言っても無駄だろう。『わかった』と絵文字も顔文字も句読点すら入れずに返信しておいた。これじゃあ私も電報だと思いながら、授業の準備を始めた。

本日最後の授業終了から三十分後、私はようやく屋上に続く非常階段を昇っていた。球技大会の出場競技決めが予想外に長引いてしまい、よそのクラスの生徒はとっくに部活や塾に行くなり帰宅しているような時間になってようやく解放されたのだ。一応限野には遅れるとメールしておこうと思ったのだけれど、クラス全体が殺気立っている中で携帯を開く勇気はなかった。

今まで特に時間や場所を決めた待ち合わせはしていなかったので、限野が他人の遅刻をどう思うタイプなのかはわからないが、普通の神経なら無連絡で三十分の遅刻は怒るだろう。私だったら絶対に十五分も待たされた日には帰ってしまう。限野はどうだろう。

まぁ帰っていてもいなくても、こちらの予定も聞かずに一方的に待ち合わせ場所と時間を指定されたという事実を差し引いても謝るべきであることは確かだ。
そして屋上に続く重いドアを開いた。少し力を入れてドアを押すと風が吹き込んできた。視界を上げれば一面に澄み渡った青空が広がっている。春らしい心地よい風も吹いているし、意外とこの屋上はいい場所かもしれないと思いながら視界を下へとずらす。
そこにはコンクリートの地面と金網のフェンス、それだけ。ぐるりと百八十度辺りを見回しても同じ。
屋上には私以外誰もいない。
さすがに帰ってしまったかと思っていると、背後で再びドアが開く音がした。
「お、一宮のほうが早かったか。入れ違いにならなくてよかった」
そんなことを言いながら屋上へとやってきたのは私が待ち合わせしていた相手、限野だ。
「……え、何？　私のほうが早かったわけ？　え？　私授業が終わって三十分も経ってから来たんだけど？」
「あ、そうなんだ？　俺は携帯いじってたらいつの間にか時間が経ってた」
何の悪気もなく言う限野の顔を張り倒してやりたい。
「あんた、もし私が授業が終わってすぐここに来てたらどうしたの？」
「そうしたら一宮が待っててくれるだろ？」
「十五分待って来なければ帰るわ」
「それならせめて先にメールくらい入れてくれよ」
「電話もメールも好きじゃない」
「おいおい。わがままな奴だなぁ」
子供を相手にするように言う限野にこめかみが引き攣る。
「限野だけにはわがままとか言われたくない」
「マジで？　奇遇だ、俺も一宮にだけはわがままとか言われたくな

い」
　ホント奇遇だなぁなどとほざきながら限野は笑っている。とても楽しそうに笑っている。腹が立つほど楽しそうで、怒っているのがバカバカしいほど笑顔だったので、何だかこちらの怒りもしぼんでいった。諦めと言うか、呆れと言うか。
「あーもういい。それで要件は何？　意味もなく人のことを呼び出したわけではないんでしょ？」
　仕切り直すように言った私に限野は意地悪く笑った。
「何だよ、一宮は全ての行動に意味を持たせないと気が済まないタイプか？」
「別に何の意味もない行動好きよ？　例外は結果として私に害がなければ。特にあんたの無意味な行動によって私が不快な思いをしなくて済むならばだけど」
　嫌味っぽく言ってやったつもりだったのに、なぜか限野はその答えを聞いて爆笑した。心底おかしそうに声を上げて笑いやがった。
　気付いてはいたけれど、よく笑う男だ。笑いを納めることもなく限野は言った。
「うんうん。そりゃそうだ。俺も一宮の無意味な行動で実害が及んだら一生呪い倒したくなるもんな」
「地味に陰険だね、限野は。健全な高校生が呪うとか言わないでよ」
「いや、別に俺は健全な高校生目指してないから」
　そんな笑顔できっぱり断言するようなことでもないだろうに。親御さんが聞いたら泣くぞ。
　限野は笑うだけ笑ってフェンスに背中を預けてもたれかかった。
「ま、俺らが健全なんてなれるわけねーじゃん」
「俺らって何？　まさかそれ、私も含まれてる？」
　反射的にそう答えたけれど、本当はわかっている。
　限野の言うとおり私は健全な高校生になんて、健全な人間になんてなれやしないって。いつの頃からか漠然と何となく、私は普通に生きて普通の人間になることなんてできないってどこかで確信して

いた。今でこそ普通らしく生きているけれど、いつかどこかで普通から大きく逸脱してしまうだろうと、そんな予感が常にあった。
別に日常生活に問題があったわけじゃない。家庭環境が悪いわけじゃない。子供の頃から勉強も遊びも人間関係もそこそこうまくこなしてきたと思う。少し要領がいい程度の普通の子供と周囲にも認識されていた。何不自由なく育て、愛してくれる家族だっている。
恵まれていると誰が見たって自分自身でだって思うのに、私は健全な人間になんてなれない。自分が異常なのだと確信していた。そして異常な自分を驚くほどすんなりと受け入れていた。
そして限野も。
目の前で笑うこの男も自分と同じ異常だ。どこがどうと言うのでなく、そういう風に生まれついた人間だ。
これもまた前世からの因縁とかいうやつなのか。
「別にいいけど」
無駄な思考を打ちきるようにわざと大きな声を出す。
限野はそんな私の行動を見てやはり笑っている。観察するように、見守るように、喜ぶように、呆れるように。
「それで結局要件って何？　私、お腹がすいたから早く帰りたいんだけど」
「ん。あー大したことじゃねーけど」
大したことない用事で貴重な放課後を搾取するな。
「一宮が何しろほとんど何も覚えてないから俺もどうしよっかなーと思って」
「私が覚えてないことってそんなに重要？」
「重要って程でもないな。どっちかっつーと瑣末（さまつ）」
「おいこら」
人を捕まえて瑣末とは何だ。
「覚えてようがいまいが、まぁそんなことはどっちでもいいんだよな。俺は今後の経過を見たいだけだし。一宮が思い出すか、思い出さないか。それは俺の中では割かし重要度が高いけどな」

「人を実験動物みたいに言わないでくれる？」
「まぁまぁ。とりあえずそれでだ。まずは俺なりにアクションを起こそうと思って」
「ほう。アクションねぇ」
「うん。で、餌を撒いてみることにしたんだ」
にこーっと。まったく邪気の感じられない笑顔で限野は言った。
「餌？」
「そうそう。これからいっぱい来るぜぇ」
くつくつと笑い、限野は空を見上げる。
「どの程度喰いつくか、楽しみだよな」
「……それは私に害が及ぶ話じゃないよね？」
もう既に嫌な予感しかしないが。
案の定、限野は満面の笑みを浮かべた。
「害が及ぶ前に思い出すか思い出さないか、賭けるか？」
「ちょっと、害って何！？　そんな面倒くさいこと嫌！」
「そこで面倒くさいって返せるのが一宮だよな。さっすがー」
気のない拍手に最早何か返す気力も起きない。どうせ無駄だ、何かしらの結果が出るまで限野は自分の行動を止めはしないだろう。
それに、何だかんだ言って面倒くさいだけでもない。
限野の言う餌とやらに、その結果自分にどんな変化が現れるかということに、私自身も興味を持ってしまっていたのだから。

2話

それからいつものように何となく一緒に下校することになった。駅までの道は終授業終了から随分時間が経っている上に、部活はまだ終わっていないという半端な時間のせいか他に人気がない。車が通るには幅が狭すぎるため、私達は堂々と道の真ん中を歩いていた。

すると歩きながら携帯をいじっていた限野が深く溜息を吐いた。

「この携帯、けっこう使い勝手悪いんだよな。変えるかな」

「最新機種なのに！？」

限野の最新スマートフォンは確か先月かそれくらいに発売したばかりの代物だ。機能が充実しているだけに値段も特に張る機種。

「ああ、そう言えば限野はおぼっちゃまなんだっけ」

「ん？　おぼっちゃま？」

限野が不思議そうに聞き返してくる。自覚ないのか。

「学校で限野は政治家一族の御子息ってけっこう有名になってる。まぁ新入生総代で目立ってたしね。先生たちも随分噂していたみたいだし」

「政治家一族ねぇ。うちは末端の末端なんだけどな。縁があるって言えばあるけど、ないって言われたらそれまでって感じの」

「そうなの？　何か元首相の孫とかって騒いでる女子たちがいたけど」

学年主席で名門の家の息子なんて言われたら、そりゃあ女子も噂したりするわけで。特別華がある容姿というわけではないけれど、あくのない涼しげな顔立ちだと女受けは悪くないのだ。私のクラスでも時折限野の話をしている女子たちがいる。

すると、いつも笑みを貼り付けていてその涼しげな容姿が霞んでいた限野が呆れ顔で顔の前で手を振った。

「あ、それ誤報。そんな大層なもんじゃねーよ。あえて関係を暴露するなら、その元総理の腹違いの妹の外孫がうちの母親。だから実

際はほとんど縁なんてあってないようなもんだぜ？」
「何か噂とだいぶ違うじゃない。それでも元総理と血縁がある家なんてそうそうないけど」
「どこで尾ひれ背ひれついたんだろうな。ま、勝手に人の噂してるだけの連中なんてどうでもいいけど」
「まぁね」
本人のいないところできゃいきゃい噂して喜んでいる相手にわざわざ真実を教えるような必要はないだろう。何だかんだで本人たちもその信憑性の低い噂を共有することによって楽しんでいるのだから。
「ま、今回は政治に関わることも関わらないことも可能な程度の家に生まれるつもりでいたから成功だな」
「成功って……望んでそういう家に生まれたとか言うわけ？」
「当たり前だろ」
限野は何を今さら、という顔をした。
「そういう家に生まれるように、前回色々がんばったんだからな」
彼の言う『前回』と言うのは前世のことで、つまり前世で来世はこういう家に生まれたいって望んでそして実際、今生の限野冬季は望んだとおりの家に生まれたわけで……。
そんなこと出来るわけない、と言ってやりたくなったけど言えなかった。
それが冗談でも嘘でもないって、私はわかっているから。限野はそんなことすら可能にする人間だって私は知っている。そして前回もそういう人間だったと、考えるよりも前に理解している。
「……何て言うかこれだけ色々あると、もう何が起きても驚かない気がする」
「そりゃいい傾向だ」
などと笑う限野をスクールバッグで叩きつけて先を歩き出そうとした時、視界の隅で何か黒いものが動いた。猫かと思ってまた歩き出そうとしてようやく気付く。

黒いそれは猫じゃない。耳も目も鼻もない、ただの黒だ。それはアスファルトの地面から這うように私のほうへと移動してくる。
「ちょ、何か変なのがいる」
反射的に限野のほうへと走り戻った。
「ああ、影だな」
無駄に落ち着きはらった様子で限野が答える。
「影って」
恐る恐るもう一度振り返ると、確かにアスファルトに張り付くように存在する黒いものは影だ。だけど影はあんなにまっすぐ陽光とは逆方向に動いてこない。何より、地面から手足のように伸びてきたりしない。
しかもアスファルトを通行中だった蟻の行列の上を通過したかと思えば、まるでそのまま飲み込まれたかのように蟻の行列は消えてしまっていた。
おかしい。物理的にありえない。そもそも動く影なんてもの自体、ありえないわけだけど。一体どんな現象で蟻が影に消えるって言うんだろう。もう何が起きても驚かないとか思ってわずか数秒で私はその意見を撤回せざるをえなくなった。
「何なの、これ？」
「動いてるな」
めずらしい生き物を観察するように限野はその恐らく影と思われるものを見ている。
「ねぇ、あの影、こっちに寄ってきてない？」
ゆっくりとだけど確実に私のほうへと寄ってきている。試しにちょっと右のほうに移動してみると、まっすぐ這ってきていた影は角度を変えてやはり私のほうへと寄ってくる。
「寄ってきてるな、一宮のほうに」
こちらの焦りなど何のその。さわやかな笑顔で答える限野。
顔面に何か堅いものでもぶつかって鼻血を吹けばいい。
「やだ、こっち来た！　限野！」

「はーあーいー」
嫌味な程に呑気な返事をしてくれる。
なぜこいつはこんな非現実的な目の前で起こってこうも平然としていられるんだろう。そりゃあ前世の縁とか、来世に生まれるならどんな家だとか決めて実行できるような非現実的な人間とは言え……。
「って、これ、まさかあんたのせいじゃ……さっき言ってた餌を撒いたとかってやつじゃないよね！？」
「まぁ餌を撒いたから向こうから来てくれたんだろうな。まさかこんなに早く来てくれるとは」
やはりこいつのせいか。
「ねぇ。まさかこの影に接触したらさっきの蟻の行列みたいに消えちゃうとか……」
「あるかもな」
その簡潔な返答に背筋が凍りついた。
「わ、私、どうしたらいい！？　限野は知ってるんでしょ？　だからそんなに落ち着いてられるんでしょ！？」
「まぁまぁ、落ち着けって。とりあえず自分で何とかできそうにないのか？」
「こんな理解不能の事態に陥った時の対処法なんて知らない！」
そうこうしているうちにも影はこちらへ向かってきて、伸ばされた部分が今にも触れそうな距離にやってきた。
「限野、教えて！　私がこの影をどうにかできる方法！」
必死に声を上げると、ようやく限野はこちらへとやってきた。
「んー本当にほとんど覚えてないんだな。自分に危険が迫れば都合よくちょっとくらい思いだすかとも思ったんだけど。でも俺任せにするだけでなく、自分も何かしようとする姿勢はさすが一宮」
限野はまるで気のない褒め言葉を吐いてから肩にかけていたスクールバッグの中からペットボトルを取り出した。中にはまだ半分くらい緑茶が残っている。

「ま、それもまた一興。自分じゃあとりあえず俺が見本を見せてやろう。こういうのはだ、こうすればいいんだよ」
ほら、と言ってペットボトルの蓋を上げた。そしてそのペットボトル逆さまにした。
すると当然ペットボトルの中身、半分ほど残っていた緑茶は重力に従って地面へと落ちる。勢いよくアスファルトの地面の上、この奇妙な影の上へと。
お茶を影に落としてどうなるって言うのか。
そう言おうとしたところで、何と影から紫の煙が上がり始めた。じゅうじゅうと溶けているような音を立て、影が少しずつ小さくなっていく。そしてやがて、影は最初からなかったかのように消えてしまった。後にはアスファルトの地面だけが当たり前のように残っていた。まるで今まで見ていたものなど全部嘘だったかのように。
「はい、終了ー」
限野の明るい声に我に帰る。
その手には空になったペットボトルが握られている。
「そのペットボトルの中身、ただのお茶じゃなかったの？」
「購買で百円で勝ったやつだけど、ちょっといじってさっきみたいな『妙なもの』を消せるようにした、言うなれば聖水的なお茶」
「聖水的なお茶って……何てありがたみのない響き」
「何だよ、そのありがたみのない響きのお茶のおかげで一宮は影の脅威から助かったわけだろ？　もっとありがたがれよ」
小さな子供のように不満がる限野を見ていたら気が抜ける。
「わかってるよ、助けてくれてありがとう。で、さっきの影って一体何だったの？　私は今まであんな物体にお目にかかったことはないよ」
「ああ、一宮はああいうのと遭遇するのは今回は初か。あれはだな、うーんと悪魔とか魔物的なあれ」
「……限野の日本語の乱れは嘆かわしいと思う」
「俺一人の日本語が乱れてるみたいに言うなよ」

「聖水的とか魔物的とか、いい加減な言い方をするからでしょ」
「だって明確な定義のあるものでもねえし、それっぽい物としか言いようがないだろうが」
明確な定義のない物体を一日に二つも見るなんて。何てわけのわらかない日だろう。今日はきっと厄日だ。
「そもそも魔物っぽいって言われたって全然ピンと来ないし。何であんなわけのわからない物体がこんな平和な通学路にいるわけ？」
「それはだな、俺らが現代日本のこの辺にいますよーってわかる奴にはわかるように吹聴したから」
まるで一仕事やり遂げたかのような満足げな顔だ。
「まさかそれがさっき言ってた餌？」
「おう。その通り」
輝かんばかりの笑顔で答えるこいつの頭に、一度隕石でも落ちてくればいいと思う。
「俺らは前回もあっちこっちで恨みも買ってたからなぁ。執念深い連中が恨みを晴らしに来てもおかしくはないだろーな」
遠い目で語る『前回』。奇妙な言い方ではあるが、それは前世での話なのだろう。
そうなのか。私は前世において限野の前世と共にそんなにあちこちで人様の恨みを買うような生き方をしていたのか。なら一生、死ぬまでそんな記憶など蘇らなければいいと半ば本気で思ってしまったじゃないか。
「って待った。それって前世の話でしょ？　本当にあっちこっちで恨みを買ったとしても、その人たちって今も生きてるわけ？　限野の言う前回ってそんなに最近なの？」
矢継ぎ早に訊く私に限野はけろっとした顔で答えた。
「まぁそう昔ではないけど、最近って感じでもないな。えーっとだいたい二、三百年前くらいか」
軽い口調で言うから全然大したことのように聞こえないけれど、二、三百年と言ったら西暦一七〇〇年から一八〇〇年代くらい。日

本ならば江戸時代半ばから幕末、明治にかけて。赤穂浪士の討ち入りがあったり、田沼意次が老中になったり、黒船が来たり、戊辰戦争があったり、大政奉還が行われたり、大日本帝国憲法が施行されたりした。

これが世界史ならばマリー・アントワネットにナポレオンだ。アントワネットがオーストリアで生まれフランス革命でギロチンの露と消え、吾輩の辞書に不可能はないナポレオンが皇帝に即位したり、アメリカ大統領・奴隷解放の父リンカーンが生きて暗殺された時代。

歴史の教科書で扱われ、当時の偉人たちは既に伝記として読まれ、その時代を生きた人々は既に墓の下だろう。

「限野」

「何だ？」

「私達は木にでもケンカを売ったんですか？　樹齢何百年の大樹に恨みでも買ったんですか？　それともかなりご長寿のゾウガメあたりですか？　あるいはクマムシですか？」

「あー木とか長生きだよな。樹齢何千年とかな。ゾウガメもアドワイチャくん辺りは二五〇年いったかどうかって言われてるしなぁ。ああ、でもクマムシは二百年までは生きた記録って俺は知らないけど」

「冗談を冗談で返さないでよ」

自分から話題を振っておいて恐縮だけど、何もそんなことに真面目に答えてほしいわけじゃない。

じろりと睨むと、限野は悪びれる様子もなく言った。

「だって、そんなこと答えなくて本当は一宮だってわかるだろ？　じゃあいいじゃん。俺、冗談好きだし」

「じゃあまさか本当に、前世でうっかり恨みを買った方々も今の世に生まれ変わっていて、前世の恨みを晴らさんと私達を狙ってきたりするとか言うわけ？」

「ご名答。ほら、ちゃーんとわかってるじゃんか」

そんなことわかりたくもない。こんな荒唐無稽な答えが正解なら

一生無知でいたい。
「て言うか、私達以外にも前世のことを覚えて生まれ変わる人なんているんだ？」
「そりゃいるさ。まぁかなり少数であることは確かだけど。でもって前回恨みを買った連中なんてどうせ俺らと同じ穴の狢だし、記憶を持ったまま生まれ変わるくらいはしてても驚かねーよ」
「同じ穴の狢って、私達は前世で一体どんな穴に入ってたって言うの？」
ろくでもない穴であることだけは確かだけれど。
「そこは思い出せばわかるさ」
「何かもう、これ以上思い出さなくてもいい気がしてきた……」
「おいおい。そんな釣れないこと言うなって」
茶化すように笑ってから、限野は思い出したように口を開いた。
「あ、そうそう。それでさっきの影はだ」
限野は既に何の痕跡もないアスファルトの地面へと目線を向けた。
「あれは魔術だな。それは分かったか？」
「……全然」
て言うか魔術って。
今時魔術ってどうなんだ……とは思ったけれど、でも言えなかった。だって私は知っている。『そういうもの』がこの世に実在した頃を私は知っている。当たり前に魔術が存在した日々を、私の中の何かは覚えている。
「全然分からなかった。でも限野に言われて分かった。あの影はそういうものだって、今は嫌になるほどはっきり理解している」
「上出来」
私の答えに限野は薄く笑む。
「一宮は意外に真っ当な人間っぽく生きてきたみたいだったし、今回は全然ダメかもなーとも思ったんだけど」
「意外に真っ当って失礼な。あ、でも私には限野みたいなことはできないと思う。魔術とか今で言う非現実が実在することは理解した

けど。ちょっといじって聖水みたいなものを作ったりとか、そんなことが出来る自信は全くない。て言うか私も前世でそんなもの作ったの？」
「作った。ものすごく」
事もなげに答えられた。
「……駄目、思い出せない。実際に見たらしい前世の光景は目に浮かぶんだけどね、どういうことをしたかまではわからない」
「もうこうなると記憶喪失だな」
そう言いつつもおかしそうに笑う限野。
「前世のことで記憶喪失とか言われたら世の中ほとんどの人間が記憶喪失だよ」
「他の連中はともかく、一宮は覚えていて当然だからな。そういう風にしたはずなんだし」
「そういう風に、ねぇ」
確かにその辺はぼんやりと覚えていると言うか、理解しているのだけれど。
私は前世を覚えているように生まれ変わった。そういう風にしたはずだった。
それは私もわかっているのだけれど。
「とりあえず思い出す思い出さないは置いておいても、限野言ったでしょ？　これからどんどん来るって。それってさっきの影みたいなのがでしょ？　私は一体どうやって自衛すればいいのよ？　四六時中一緒にいるわけじゃないんだから限野がいない時、私は自分の身を守る手段がないじゃない」
「そう言えばそうだなぁ」
あからさまにどうでもよさそうな態度だ。
そもそも誰のせいであんなわけのわからない物から自衛しなきゃならないような事態に陥ったと思ってるんだ。
「元をただせば限野が餌を撒くとかしたからこんな目にあったんだからね。責任とって無力な私を守る手段を寄越しなさいよ」

「そんな胸を張って無力って……」
呆れ顔で限野が呟いたけど気にしない。
「限野は魔術だとか、前世でやったことが今もできるのかもしれないけど、前世が何であっても今の私はそんなことできないの。だから何とかして」
下手に出るのは癪だったのでできるだけ高慢に言ってやる。
普通だったら気分を損ねそうなものだけれど、やっぱり普通じゃない限野は面白がるように笑った。さすが普通じゃない人間。
「んーそれじゃあ」
限野は少し考えるようにしてからスクールバッグから黒マジックを取り出した。さらにその辺りをきょろきょろと見まわしてから、その辺りに落ちていた小石を手に取った。そしてそれに黒マジックで何かを書き始める。
一体何をしているんだろうと思いながらもその行動を見守っていると「出来た」と声を上げて限野は私にその小石を差し出した。
「ほら、これをやろう」
偉そうに渡されたのは道端に落ちていた、手のひらですっぽり包み込めるような小石。しかも限野の手によって何か模様のようなものが黒マジックではっきりと描かれている。
「……路傍（ろぼう）の石」
探るように限野を見れば、彼は堂々と言い放った。
「元・路傍の石。今・俺特製のお守り」
「……この際路傍の石ってこといい。それっぽい模様が描いてあるのもいい。けど黒マジックってどうなの？　普通刻むものじゃないの？　こういうの」
「描いてあればいいんだよ。別に彫らなくたって、これだってきっちり油性マジックで描いたからそう簡単には落ちねーもん」
「油性マジックで描いた模様とか、ありがたみがないんだけど」
「何だよー別に文句あるなら受け取ってくれなくていいんだぜ？」
拗ねたように石を持った手を引っ込めかけた手を慌てて掴んだ。

「待った。いや、私は限野を信じてるから。もらいます。油性マジックで描かれたありがたみのない模様とその辺に落ちてそうな石でももらいます」
「最初からそう言えばいいんだよ」
満足そうに笑って限野は石を私の手に置いた。
本当に見れば見るほど普通の石だ。しかも模様はマジックで描かれているからどうにも胡散臭さは拭えない。悪徳商法に引っかかりかけている気分だ。本当に効果があるのかどうか不安になってくる。
「あ、そう言えばこの石ってお守りなんでしょ？　これでさっきの影みたいなのが寄ってこなくなったりするの？　それともああいうのが現れたら自動的に攻撃でもして追い払ってくれたり？」
「基本的にヤバイ奴はそれを持ってさえいれば一宮の姿を視認できない。さっきの影みたいな低級には一宮の姿が見えるし危害も加えてることもできる。ただし本格的な……怪我だとか命の危機だとかに及ぶほどの危害は加えられなくなる。多分」
「……多分？」
不吉な言葉につい語気が荒くなる。
まぁまぁと宥めるように限野は言った。
「俺だって今は一応普通の学生だし、そんなに前みたいにバンバン魔術使ったりとか出来ないんだって。どうも今回の体は魔術と相性がよくないんだよな。あまり大したことが出来ない」
「相性なんてあるの？」
「あるな。今の俺の体は魔術を使うには全然向いてないんだよ。完全に現代人向けの作りだな。そのうち一宮も試してみろよ」
「試すって言ったって、魔術の使い方なんて知らないよ」
「運がよければ何となく思い出すって」
呑気に笑って限野は歩き出した。
その後ろを歩きながら訊いてみる。
「そんな簡単にいくもの？」
「いくだろ？　俺達だし」

「どんな根拠？」

そう言いつつも、確かに何とかなるかもなと思う自分がいた。

限野に感化されているのか、それとも元から私はこういう性格だったのか。

3話

平和と言えば平和な毎日だ。

あの魔術だという奇妙な影と遭遇して以来、私は時々そういった非現実的な奇怪なモノに遭遇するようになった。

自宅の庭で小さな人間、まさしく小人を見かけたり。（庭に穴を掘っていたと思ったら、丁寧にお辞儀をして去っていった）

限野と電車で別れて帰宅途中、カラスに話しかけられたり。（私と目が合うなり「本当にいたのか」とか言って飛び去った）

外出しようと思ったら大雨だったのでやめたのに、窓の外は青空が広がっていたので止んだのかと思ってもう一回外に出たらやはり大雨で、でも窓の外はどう見ても晴れていて。家族はふつうに傘も持たずに出かけて行ったので、どうやら私が外に出る時だけ降るらしい雨という非常に不快な現象に遭遇したり。

だけど私が一人の時に遭遇したこれらはまだいい方だ。限野のくれたお守りとやらが訊いているのかあれから二週間、実害というほどのものは一度も受けていないから。

限野と二人でいる時に遭遇したモノというのは、思い出しただけでもうんざりしてしまう。

相変わらず私達は一緒に下校しているのだけど学校から駅までの道のり、あるいは電車の中では容赦のない奇怪に襲われている。

他にも多数の生徒が歩いていたはずの駅までの道で、突然霧らしいものが辺りに出てきたと思ったら他に歩いていた人たちの姿が消え、行けども行けども誰もいない、そしてどこにも辿りつけないという怪奇現象に遭遇もした。限野が何だか呪文のようなものを唱えたら霧は晴れ、人通りもあるいつもの道に戻っていたけれど。

またある時は人気のない時間帯が悪かったのか、私と限野の周囲に突然炎が生まれ、私達は円環状に燃え盛る炎の中に閉じ込められた。これも限野が例のごとく聖水的なペットボトルのお茶というあ

りがたみの感じられないアイテムによって鎮火してくれたが、焦げ跡なども一切残らなかったので実は夢だったのではと疑ったものだ。
電車の中では天井から何の前触れもなくナイフが一振り落ちてきて、私と限野の間の床に突き刺さり、そして煙のように消えたり。他の人には見えていないようだったから不思議だった。
他にもまるでライオンのような大きさの猫に襲われかけたり、角が生えた絵に描いたような小鬼に石を投げつけられたり等々。
何で限野といる時はこんなに危険度が増すのかと訊いてみたら、お守りがなかったらこの程度の奇怪な危険には当たり前のように遭遇していただろうと言われた。
そして思い出した。この前、限野は言った。

「俺らは前回もあっちこっちで恨みを買ったからなぁ」

俺ら、と複数形だ。話の流れから考えればその俺らに含まれるのは間違いなく私だ。
まさかと思って訊いてみたら、あの日撒いた餌とやらは私だけでなく限野も現代日本で生まれ変わって学生していますとお知らせしたらしく、同時に私だけでなく限野も前世で恨みを買った人々から恨みつらみの籠った嫌がらせを受けているらしい。限野本人はお守りを持ったりしないのかと訊いてみたところ、この程度なら勘を取り戻すのに丁度いいから放置する、とのことだった。強いと言うか図太いと言うか。　今まであれだけ奇妙な目に遭ってきたのに私は未だに限野の狼狽する姿など見たことがない。いつだって余裕の笑みを浮かべているような奴だ。その上、実際にかなり危険な襲撃は限野の手によって撃退されているから、勘を取り戻すと言うのもあながち冗談ではないのかもしれない。
そうやって限野は勘を取り戻しているのかもしれないけれど、私は相変わらずほとんど思い出していないという状態から変化はなかった。

思い出した光景などは少し増えたし、限野との間に感じる引力めいたものはより強く感じられるようになった。そして自分でも驚くほど、遭遇する奇怪に対して冷静だった。

あんな通常じゃ考えられないような現象を前にしても、私は当たり前にその存在を受け入れている。耐性がついただけなのか、前世の影響なのかは知らないけれど。

ああいった奇怪なモノは見える者にしか見えないらしい。私の家族も学校の友達も、道往く人々も、私達の目の前で確かに存在しているはずの奇怪なモノに気付いた風もなく通り過ぎて行く。小人そのものは見えなかったようだけれど、小人の掘った穴は家族にもしっかり見えていたらしくモグラでもいるんだろうかと首を傾げていたが。

最初は人といる時にああいう奇怪と遭遇したらどうしようと肝を冷やしたものだけどその心配もなくなり、ますますもって私は奇怪に対して耐性がついていった。それがいいことなのか悪いことなのかはわからないが。

そうやって奇怪に遭遇する日々にも慣れていって、私は改めて自分の置かれた状況について考えてみる余裕が生まれてきた。

私が思い出した見知らぬ記憶は遠い時代の異国と人々。その街並みや人の姿からそれは恐らくヨーロッパ。限野は私達の前世は二、三百年くらい前と言っていたから、時代は十七世紀から十九世紀くらい。

ヴァイオリン。

鮮やかなカンバス。

無数のダイヤモンド。

上流階級だろうきらびやかな衣装を纏う人々。

絢爛豪華な城内。

研究室。

塗りかけのカンバス。

水に映る城。

尊崇。
畏敬。
奇異。
好奇。
畏怖。
嫌悪。
様々な目で『私』は人々に見られている。
だからと言ってそれを憂いたり疎んだりはしていない。
ただただ笑っている。
人間という生き物を観察するように眺めて笑っている。
時に嘲り、時に憐れみ、時に羨み、周囲の人々を見て笑っている。
たくさんの言葉。
貧しい人々。
富んだ人々。
偽る幻。
柄に文字の彫られた剣。
鬼。
子供たちの声。
髑髏。
校舎。
深く険しい山。
海。
数字の羅列。
ぎっしりと埋まったアルファベット。
百点を取ったテスト。
――ああ、時間が記憶が入り乱れている。
これは違う。
違う、今思い出したいのは。
探す記憶は。
それは――……。

記憶という記憶が頭の中で無残なまでに散乱しているようだ。
船酔いでもしたような最悪の気分で私はベッドに横になった。
思い出せる光景は本当に増えた。
見知らぬ人々、見知らぬ時代、見知らぬ街並み、よくもこうもたくさんの記憶を今の今まで忘れたままでいたものだと呆れるくらいにたくさんの記憶が鮮明なまでに思い出される。
けれど、どういうわけか私は前世における自分の名前を思い出さない。名前という、もっともわかりやすい記号がわからないというのはどうにも気分が悪い。
それに光景が目に浮かんでも、その光景がどういったものなのか分からない。
自分とその光景との関連も、自分の名前も、自分の姿も。自分に関するほとんどが今の私には思い出せずにいる。
そして思い出せないと言えば限野についても。
私に甦った光景の中には、間違いなく浅くない縁があったはずの限野の姿がない。
もちろん彼だって前世では全く違う姿かたちなのだろうけれど、それらしい人物はどの光景にもいない。見ればきっとすぐに分かるだろうと思っていたのに。
現代でもあれほどはっきりと限野の存在には気付いたのだから、より深い繋がりがあったであろう過去ならばもっとはっきりと分かる気がしたのに。
まだ私が限野と共有した光景を思い出していないだけなのか。
さて、私にとって唯一の前世への道しるべとなり得る限野という人間はどこまで信じていいのだろう。
根本的に信頼はおけるけれど、その言動を全て頭から信じるというのは実は抵抗があったりする。限野は絶対平気で嘘を吐くタイプだ。呼吸と嘘は同義で、人を騙すことに罪悪感など欠片もなく、自分が楽しむためならいくらでも嘘を吐くような人間。

我ながら酷いことを考えているとは思ったけれど、恐らくそれは疑いようもなく正解だ。限野がどういう人間性かは、入学式の日に出会った当初から、直感的に理解していたから。

けど今の私は限野を信じるしかない。

この中途半端に思い出してしまった今の状況を打破するには。

限野の口から出た言葉が嘘でも本当でも、限野といれば私は思い出す。これもまたかなり最初の頃に得た確信だ。

思い出したから何が変わるとか考えているわけではないけれど、目の前にヒントがちらついているのに無視することはできない。知らないことを知らないまま放置しておける質ではない。知らないことを知らずにはいられない。私はそういう人間だ。恐らくは一宮棗として生を受けるよりもずっと前から。

4話

新たな日課は最早私の一日に何の違和感も溶け込んでいる。
かれこれ一ヶ月、毎日欠かすことなく奇怪と遭遇していればいい加減違和感などこれっぽっちもなく、一日のスケジュールに奇怪との交流は含まれていた。
「さすがにもう慣れてきちゃったよ」
言いながら、ぐねぐねと生き物のようにうねる道を歩く私。
「それはよくないな。確かに最近、前みたいに驚かなくなってきたなーとは思ってたけど」
踏み鳴らすように歩きながら道を元の直線へと戻していく限野。
「だってもう一ヶ月だし」
「そもそもだ、基本的に対処してるのは俺だぜ？　一宮はいつもその辺をどうでもよさげに突っ立ってるだけだろうが。少しは俺を見習って自分で何とかしてみようとか思ってもよくね？」
「まぁ任せっぱなしなのは心苦しいけど」
「嘘つけ」
「こればっかりはどうにもならないよ。魔術の使い方？　とか奇怪現象と遭遇した時の追い払い方とかそういうのは全然思い出さないんだもの」
「せーっかくこの俺が餌を撒いて、お守りもくれてやって、本格的な危険がない程度にああいうのと交流できるようにしてやったのに慣れちゃったとかな。もうお守り返せよ、荒療治でヤバイ奴に狙われたら必死になって思い出す気も起きるだろ？」
呆れ顔で言ってくる限野の先を歩きながら「嫌だ」と返しておく。
「この一ヶ月、俺は一宮の観察をしているわけだが」
「観察って言うな。この間も言ったけど、人を朝顔やカブトムシみたく言わない」
「さすがにこうも変化がないと飽きてきた」

観察してきた挙句に飽きたとは何て勝手な言い分だ。
その勝手な限野は考え込むような顔をして首をひねってた。
「どうすっかな。短い人間の人生の一ヶ月をこうも無駄にされるとは。俺の予定ではそろそろ全部思い出してもいい頃だと思ってたんだけどな。俺の予定を崩すあたりが一宮らしいっちゃらしいが」
「限野には私が一体どういう風に見えてるのか気になるよ」
「さぁて。どうだろうな」
限野は意地悪く笑った。答える気はなさそうだ。
「そう言えばさ、私って前世で何やってる人だったの？　何か色んな光景がありすぎて自分が何だったのか全然想像もつかないんだけど」
「そこは頑張って思い出せよ。俺が教えたらつまんねーもん」
「じゃあせめて私と限野は前世でどんな関係だったのか教えてよ」
「それも言ったらつまんねーから絶対嫌だ。俺は自力で知った時の一宮の反応が見たい」
偉そうに言っているけど、けっこう我がままな言い分じゃないか。
「もし前世で限野と夫婦だったりしたら死にたくなるんだけど」
「俺も死にたくなるわ。そしてもう二度と生まれ変わろうとか考えない」
久しぶりに意見が一致した。
言われる側としては屈辱的な一致だけれど。
「ま、それはないってわかってるけど」
「ん？　わかってるのか」
「夫婦とか、そういうんじゃない。もっと何か別の形。こうもっと……あーうまく言葉にならない」
「そっかそっか」
限野は一人で納得したように頷いている。
「その辺がわかってるならまだいいか。これで前世で結ばれる運命だったのに結ばれなくて来世で幸せになりましょうとか言って心中した仲とか言われたら、スカイツリーから飛び降りたくなっちちま

う」
「せっかくの新たな観光名所を惨劇現場にしないでよ」
「一宮がその程度はわかっててよかったなぁ、ホント」
人の話など全く聞かずに限野は安堵の息を吐いた。
本当にマイペースな奴だ。
「ま、私だって前世にロマンを感じてるわけじゃないしね。て言うか、本当は前世前世なんて言いたくないわけよ。どうもロマンチックな単語っぽくて。痛いロマンチストみたいじゃない」
「少なくとも思春期で思い込みの激しい考えすぎの痛い奴だとは思われるかもな」
「不本意」
「ご愁傷様」
「まだ思われてないって」
そんな意味なんてこれっぽちもないやりとりをしながら私達はいつの間にか平面に直線に戻った道を駅へと進む。

電車の中で限野と別れ、私は一人自宅までの道を歩く。
空を見上げれば薄らと赤く染まっている。すぐそばを小学生らしい子供たちが笑いながら駆けて行く。住宅街なので周りから色々な料理の匂いが漂ってくる。
平和だ。
ついこの間まで、私の平和的日常とはこういうものだった。間違っても前世からの因縁だとか、魔術だとかそんなものは日常にはなりえなかった。
高校に入学して二ヶ月。ほんの二ヶ月でそれが随分と変わるものだ。
「世の中わからないものだよねぇ」
そう独りごちた時。
空気が変わった。
びりびりと肌を刺すような感覚。

そう気付いた時にはもう辺りには誰もいない。鳥も猫も何もいない。町中から生き物という生き物が消え失せてしまったかのよう。だけどどこか離れた場所で何か重い物が歩くような音が聞こえてくる。異様なぐらい重い音と振動が、少しずつ少しずつこちらへと近づいてくる。

嫌な感じだ。

こんなにあからさまな遭遇は一人ではしたことがないのに。限野がくれたお守りの効力が切れたんだろうか。スクールバッグのポケットからお守りを取り出して見てみたけれど、特に変わった様子はない。傍目には変化のないお守りをポケットに戻し、耳を澄ます。

その間も重い足音は近づいてくる。

まずいな。

限野の言った通り少しは自分で何とかできるよう努力はすべきだったかもしれない。努力でどうこうできるものかはわからないけれど、何もしないよりは良かったかもしれない。少なくとも心の準備はできただろうし。

さぁどうしようか。

限野に連絡……してもあの気まぐれが助けに来てくれるだろうか。そろそろ限野も自宅最寄り駅に着いている頃だろうし、面倒くさがって来てくれない気もする。

けど連絡しないよりはしたほうがいいだろう。そう思い携帯電話を取り出してみる。

ディスプレイを見れば、赤字で圏外と表示されている。

「……電波までどこか行っちゃうのか！」

衝動的に携帯を叩きつけたくなったけれど、そこはぐっとこらえた。

足音が近づいてくる。

とりあえず逃げよう。逃げ切れる保証なんてない、逃げたからってどうなるものでもない。けど今私が出来ることと言ったらそれくらいだ。

来た道を走り戻る。
重たい足音の主は実際に体重も重いのだろう。ゆっくりゆっくりと歩いているらしく、走ればそれなりに距離を開けそうだ。
基本的にあの奇怪な連中は私に危害を与えに来る。限野が撒いた餌につられて。
とは言え今の今まで被害らしい被害は受けたことがないけれど。それは悔しいけれど限野のお守りと限野自身が撃退してくれたからだ。
燃え盛る炎に囲まれても焼け死ぬことも酸欠で苦しむこともなかったし、ナイフが頭に直下してくることもなかった。巨大猫に噛みつかれることも小鬼が投げた石に当たることもなかった。
「でもあんな重たい足音の奴に遭遇したことはなかったけどさ」
せめて一度、相手の姿を確認すべきか。相手の全容が知れたら何かしら突破口が開けるかもしれないし。今の無力なる私じゃ開けない可能性も高いが。
走っても走っても足音は聞こえてくる。あの重い足音が遠ざかることはない。こっちは走っていて、向こうは明らかな鈍足で歩むペースも変わっていないと言うのに。
走りながらどうしたものかと考え込んでいたところ、ブレザーのポケットから振動が伝わってきた。
そんなことあるわけないのに。そう思いながらも慌ててポケットをまさぐってみれば、さっきまで圏外だったはずの携帯が着信を知らせて震えている。そのディスプレイに表示されている名前は限野。何てタイミングだろう。半ば呆れ、半ば助かったという気分で通話ボタンを押す。
「限野！？」
「よぉ一宮。元気ー？」
「元気じゃない。お守り効果が切れたのか知らないけれど、突然町から人も動物もいなくなって、挙句にやたら重い足音の奴が近づいてきてるみたい。異様に肌がびりびりするし、どう考えても雑魚レ

ベルって感じじゃない」
早口に言い募ると携帯の向こうで限野は声を上げて笑った。
「マジで？　一日に二個も超常現象に遭遇できるとかなかなかねぇよ。さっすが一宮」
何がさすがなのか。と言うか笑うのをやめろ。仮にもこっちは危機に陥っているんだ。
「で、足音が重い奴ってどんなよ？」
「知らない。まだ姿は見てない。けどどこまで行っても足音が途切れない。鈍足っぽいｋｕｓｅに距離を開けた気がしない」
「はぁん。じゃあいっそどんな奴なのか見てみろよ」
真剣さなんて欠片もない声で限野が言う。
「それは私もさっき思ったんだけど、でも見ちゃって大丈夫なの？　て言うか姿が見えるほど近くまで行ったら捕まりそうな気がする」
「いや、知んないけど。けど見なきゃどうにもならねーだろ？」
「そうだけど」
「じゃあいい機会だから自分で何とかしてみろよ。お守りに効果がなくなってきたってんなら、尚さら今後のことを考えれば自分で対処できるようになったほうがいいだろ」
限野の言うことはもっともだ。
もっともだとは思う、思うのだけど……。
「そもそも限野が餌を撒いたりしたから私はこんな目に遭ってるんだけど」
「あっはっは」
白々しい笑いに本日二度目の携帯を叩きつけてやりたい衝動に駆られた。
「まぁ一宮。ピンチはチャンスとか言うじゃねーのよ。つーわけでチャンスと思ってがんばれ。俺は狩りにでも出つつ一宮の武運を祈ってるから」
それから小声で「あ、やべぇ回復回復」と聞こえてきた。

「……狩りにって……ゲームか！　モンスターをハント中か！」
「俺初心者だから、翼竜一匹狩るのも大変なんだよ」
「知ったことか！」
「一宮も今度オンラインでやろうぜー」
「今度があるかすら怪しい危機に私は今遭遇してるんだけど！」
「うん、だからとりあえず相手の姿を確認してこいって。そうすれば俺もアドバイスくらいできるかもしんねーし」
「アドバイス……」
　してもらったところで私に何か出来るだろうか。限野のように魔法じみたこと、本当に私に出来るだろうか。
「私一人でも何とか対処できる方法はあるの？」
「あん？　当たり前だろ？　俺が言うんだから間違いねーよ。お前に出来なきゃ誰にも出来ねえ。自覚しろ、てめぇがどういう生き物か。どういう経緯で今この世に生きてるのか」
　初めて聞く、面白がる調子のない声だ。
「やりもしないうちに出来ないなんて言わせねぇ。無理だから諦めるなんて許さねぇ。てめぇがそんな腰ぬけなんて絶対に許さない」
　自分勝手な言い分だ。
　だけれども、そうだ。
　私だって、やる前から出来ないと諦めるなんて、そんな自分は許し難い。
　私が腰ぬけだなんてあってなるものか。
　どうやら私は焦って自分を見失っていたらしい。何もかも他人任せなんて、そんなのは私じゃない。
　そして絶対的な現実として理解する。
　――限野に出来ることが、私に出来ないわけがない。
　それが世界の道理、違えることのない法則、真理ですらあるかのように理解する。
「じゃあ、あの鈍重ゴーレムを見てくる」
「おう。見て来い、見て来い」

その声はもう笑い混じりに戻っている。
「あ、電話切らないで。どういうわけかさっきまで圏外だったから、また繋がらなくなったら困るし」
「りょーかい。……あ、逃げられた。くっそ、フィールド上飛びまわってんじゃねーよぉ」
「ゲームを置けっ！」
通話ボタンは押したまま携帯をポケットに突っ込んで、私はそう遠くない場所に聞こえる足音のほうへと向かった。

5話

一つ足音がする度に地面に振動が伝わってくる。どんな重量の奴が歩いていると言うのか。

向こうに見つからないように、こっそりと姿を見られればいいのだけど。

音のする方を窺いながらゆっくりと近づいていく。民家の塀に隠れるように辺りを窺っていると、強い光が目を刺した。丁度目的の方向に太陽があるらしい。じきに沈もうという太陽が赤々と光っている。赤々と輝く太陽。そしてどこからか伸びてくる複数の黄金色の光。

……複数の黄金色の光？

家々の隙間からはいくつもの黄金色の光が見える。揺らめきながらきらきらとした光を放っている。

その間も重たい足音は近づいてくる。私がどこにいるかわかっているかのように、確実に向こうから近付いてきている。そして音のほうからはまばゆいばかりの黄金色の光が。この光はあの足音の主が放っているものなのか。

十字路を横にまっすぐ歩いてくるらしい足音。

そして十字路を縦に進んできた私。

このまま行けば十字路の中心で私達は出くわすことになるだろう。そんなにしっかりと直面しなくてもいいし、このまま向こうが姿を現すまで待機するか。向こうが十字路の真ん中に現れればどうせ姿は見えるようになるのだし。

振動と共に足音がどんどん近付いてくる。

それに呼応するように私の心音も大きく早くなっていく。

ここから十字路の中心までは直線距離にして三十メートルほど。少し距離を置き過ぎかとも思うけど、近づきすぎて逃げられなくなっても困るからこれくらいでいいだろう。

家と家の間から光が漏れてくる。もうじきだ。
息を潜めてその時を待つ。
そして、十字路の中心にそれは現れた。
まっすぐ横を向いていたそれが、重たい動作でこちらを向く。
やはり向こうからは私の居場所などわかっているのか、何の迷いもなく私のほうを向いた。そして一歩、私がいる道へと踏み出してきた。
反射的に逃げるように走り出しながら携帯に向かって叫ぶ。
「……っ何、あれ！　限野！」
「もしもーし。相手の姿は見られたかー？」
「見た！　何あれ！　あんなものまで存在するの！？」
「俺が知るか。見てねーもん。とりあえずどんな感じか言ってみろよ？」
電話の向こうの限野はあくまで冷静、と言うか呑気。一人で焦っている自分が悲しくなってくるほどに呑気だ。
「……あれに名前をつけろと言われたら、私はゴールデンゴーレムというありきたりな名前をつける！」
と、限野が電話の向こうで激しく噴き出し、大笑いを始めた。
「ちょっと！　冗談で言ってるんじゃないんだけど！」
背丈は住宅の一階くらいくらい。その形はまるで頭、左右それぞれの上腕と前腕と五指のついた手、胴、左右の上腿と下腿と足でそれぞれ規格外に大きな金塊で造り、繋ぎ合わせたような姿。まさにゲームに登場するモンスター、ゴーレムだ。
そう説明すると、限野はまだ笑いながらこう言った。
「おいおい一宮。確かにそりゃあゴールデンゴーレムって感じだけど安直すぎるだろー？」
「名前はもういい！　相手がどういう奴か伝わった？」
携帯を耳に当てたまま、ゴーレムとは反対方向へ走り出す。
「おーう。伝わった、伝わった。まさしく相手はゴーレムだな。サイズはでかいけど。一宮、カバラ知ってる？」

「知らない！　……いやちょっと思い出しそう！　でも集中できないから思い出せないかもしれない！」
「へいへい。まぁ今は詳しいことは省くけど、とにかくカバラっつー知識があるのな？　ゴーレムはそのカバラの秘術で造った人造人間のことだ」
「あんなバカでかい人間なんていてたまるか！」
家に入ったら天井に届いちゃって大変じゃないか。
「だーから人間ではねーよ。人造の人間。人工物。天然自然モノみたいにはいかないさ。俺が知る限り、人間と呼べるような完成度のシロモノを造れた奴はいない。せいぜい昔のちゃっちいロボットレベル。言い換えればゴーレムも土製のロボットみたいなものか」
「確かに二足歩行がやっとっぽいけど」
後ろを振り返れば大きな動作で歩行しているゴールデンゴーレム。今にもバランスを崩して転んでしまいそうだ。
「ああ、ゴーレムってな、けっこうやばい奴はやばいんだよ。世界が滅ぶんじゃないかって騒いだ奴らもいるくらい」
「……それで？」
「けっこう頑張って殺しにくるかもしれないから、殺されないようにがんばれ」
そんなアドバイスは求めていない！
「殺されないようにするアドバイスを寄越せ！」
「ん。じゃあゴーレムを壊せばいいよ」
「壊せばいいよって」
簡単に言ってくれる。どうやってあんな金属製のデカブツを壊せと言うんだ。戦車でも引っ張ってくればいいのか。
「体のどこかにさぁ」
限野は相変わらず緊張感のない声で言う。
「エメトって書かれてるから。それをメスにすればいい」
「えめと？」
「『ｅｍｅｔｈ（エメト）』。ヘブライ語で『真理』って意味。そこからｅを

取ると『ｍｅｔｈ（メス）』、『死』って意味になる。そうするとゴーレムは土に還る……らしい」
「……『らしい』って、何でそこだけ曖昧なの」
「一般にはそう言われてるってこと。額に書いてあるとか、口に書いた紙を入れたとかも聞いたな。それにそんな弱点をほいほいぶら下げるのも危ないし、体のどこか見えにくい部分にこっそり書いてあるかも。ああ、でも俺だったら今創るとしても、いざって時に壊しやすいように手の届く範囲にやるな」
「待った。もし口の中にそのエメト？　って書かれた紙があったらどう頑張っても取れないんだけど。二階くらいまである大きさの奴の口なんて届くわけないじゃん。見えないのを探すのだってあんなでかい奴相手じゃそう簡単には……」
「うん。だからその時はまた考えればいいじゃん。とりあえず探して来いよ。あ、肉が焦げた」
「あんたは狩りをやめろ！」
　前世からの縁があるらしい相手が危機に陥っているというのにまだやっていたのか。
「けっこう面白くてさぁ。じゃあ俺はちょっくら討伐に行くから、一宮も頑張ってゴーレムを討伐しろよ」
「ゲームじゃないっつの！　制服とスクールバッグだけが装備でどうゴーレムを討伐しろと！？」
「えー何か武器っぽいもの持ってないのかよ。片手剣とか」
「そんなの持ち歩いてる高校生がどこにいる！　銃刀法違反で即逮捕される！」
「じゃあ、この際ハサミでもいいよ。もし書かれているのが紙なら切れるだろ？」
「ハサミ？　多分持ってないと……」
　スクールバッグを漁ってもも出てくるのはノートに教科書、ペンケース、ポーチ。ハサミの持ち合わせはない。
　そうこうしているうちにも足音がゆっくりとこちらへ向かってき

ていると言うのに。
「くっそ、ハサミもない！」
「金ってのは柔らかいから、その気になればボールペンとかコンパスの針とかでも何とかいけるかも。紙なら手でも破けるし」
「ボールペンにコンパス」
慌ててペンケースを開けると、ボールペンよりもより一層武器らしい物が目に入った。
「カッター！　カッターがあった！」
ごく普通の文房具だけれど、ないよりはいいはずだ。刃を出してみると短いけれど刃も残っていた。
「カッターか。うん、まぁ何とかなるんじゃね？」
喜びの声を上げる私に対して限野の反応は淡泊だ。周囲の雑音に混じってゲーム音楽が聞こえてくるから本気でゲーム中なのだろう。
「じゃあ一宮も狩り行ってこいよ。俺も狩ってるから」
そっちの狩りとこちらの狩りじゃ随分危険度に差があるけどね、と言おうと思ったけれどやめた。一応これは私が直面している問題なんだし、出来る範囲でくらい自力で行動するくらいはするとしよう。
けどあの巨大なゴーレムを相手に小さなカッターひとつが武器とはこころもとないが。
「……限野。参考までに聞きたいんだけど、ゴーレムってどんな風に攻撃してくる？　こう、魔法を使ったりする？」
「俺が知ってるゴーレムはあくまで劣化版の人間。普通の人間の行動パターンとそう変わらない。殴る蹴るとかだろ」
「あんな金塊に殴ったり蹴ったりされた日には骨折じゃ済まない気がする……」
「でもけっこうノロマそうだし、行動に移すまでに若干時間がかかるんじゃね？　そこを狙えば？」
「本当に簡単に言ってくれる……」
「大丈夫だって。一宮だし」

「どういう意味よ？」
「ん？　だって俺が今この世にあるもので信じるものがあるとしたら、それは俺と一宮だけだから」
「……それ、あんまり女子に言わない方がいいよ。勘違いされる」
私は限野がそういう甘酸っぱい意味で言ってるんじゃないということはわかるけど、大概の女子だったら勘違いするだろう。
「一応心得ておく。お」
聞こえてくるゲーム音楽が緊迫したものになった。ボスクラスと対戦中か。限野は黙りこみ、コントローラーのボタンを連打する音が聞こえる。
「それじゃあまぁ、私も行くか」
この心もとない装備で。携帯を通話状態にしたままポケットにしまい、覚悟を決める。そして背後に振り返ってゴーレムと対峙した。
ゆっくりゆっくり、ずっと変わらぬ速度で奴は歩いてくる。重い足音で地面が振動する。
距離は二十メートルってところか。夕日が逆光になって影を作り、限野の言う文字とやらを探すのは難しそうだ。
見たところ、紙をぶら下げている様子はない。
「……あの鈍足なら、走って見て逃げるくらい出来るよね」
スクールバッグを道端に置き、大きく深呼吸してからゴーレムへと突っ込むように走り出した。
突然向かって来られて困惑したのかゴーレムは歩みを止め、腕を上げようとしてやめたり、左右を窺うようにしたりしている。
そのまま固まっていてくれと思ったところで、ゴーレムの右腕がこちらへ伸ばされた。
やっぱり攻撃してくるのか。
走るのをやめ、後ずさろうとするとゴーレムの大きな大きな手のひらがゆっくりと近づいてくる。あんないかつい手に握られた日には粉砕骨折する。
もう一度逃げようと決めた瞬間、それが視界に入った。

伸びてくるゴーレムの右手のひら。そこには一枚の白い紙が貼られており、はっきりとした文字で『ｅｍｅｔｈ』と書かれていた。
「あった！」
叫ぶのとほぼ同時、ゆっくりと私へと向かってくるゴーレムの手のひらの紙を、力いっぱいカッターで切りつけた。
途端、ゴーレムの動きが停止した。そして手のひらから『ｅ』と書かれている部分の紙が地面に落ちた。
その固まった右手のひらに残ったのは『ｍｅｔｈ』。死。
「……やった」
無意識に落ちた呟き。それと同時に、ゴーレムの体がぶるぶると震え出した。身構えようと思った時、震えるゴーレムの体が金色から土色に変色していった。
状況を呑みこめないままの私の目の前で、土色になったゴーレムの体が中心から崩れるように飛び散った。
これが限野の言っていた、土に還るということなのか。
あれだけの大きさのゴーレムを構成していただけあって、ものすごい量の土があちらこちらに散っている。目の前にいた私の上にもこれでもかというくらい降って来た。
乾いた土に泥っぽい土が全身に降ってくる。
何とも言えない不快な体験……のはずなのに、私はその場から動けずにいた。
入学式の日とは比べ物にならないくらいの膨大な量の光景が、音が、感触がすさまじい勢いで私の中を巡っていく。
ああ、ああ。
――失敗か。どうもこれはうまくいかない。
この降ってくる土を見たことがある。
――念のため壊しやすくしておいてよかった。
こんな風に土と泥を被った。
――しかしこの壊れ方は美しくないな。おかげでこちらまで泥まみれだ。

足元に落ちた、『ｅ』と『ｍｅｔｈ』に分断された羊皮紙。
そうだ、そうだった。
大きなゴーレムを作っても、万が一の際は破壊しやすいように、手が届きやすい場所に紙を貼ったんだ。
――せっかく手間をかけて金に換えても、死ねば土に戻るのは人間らしいか。
そう。土を金に換えたんだ。
金色のゴーレムなんて派手で悪趣味で面白いと思って。
でもあまりに動きは鈍く複雑な命令も聞けない、理想には程遠い失敗作だった。
そうだ、創ったんだ。この手で。でも失敗だったからこの手で破壊した。そして、土と泥まみれになったじゃないか。
他の誰でもない、私が。
まだ私じゃなかった自分が。
「……ああ、そうだった。そういうことにしたんだったか」
土と泥まみれになったまま、私はひとり呟いた。
ポケットの中の携帯からはまだゲーム音楽が聞こえていた。？

6話

奴は本当にゲーム中だった。
誰もいない駅前のカフェのオープンテラスに置かれた椅子に座りポータブルゲーム機を持ち、食い入るように画面を見ている。
「討伐クエストはクリアしたの？」
私がそう聞くと、奴は顔も上げずに答えた。
「もちろん。で、一宮は？」
「聞くまでもないくせに」
乱暴に限野の向かいの椅子に座ると、丸テーブルを挟んで向かい合う形になったわけだけど限野は一向に顔を上げやしない。
「私は随分いいように踊らされたようで」
頬杖をついて限野を睨むと、奴はゆっくりと顔を上げた。ゲームはもういいのか、電源を切ってテーブルの上に置いて。
そしてにっこりと笑った。
「ああ、成功したんだ」
「腹立たしいことにね」
そう言ってスクールバッグから取り出したお守りを丸テーブルの上に置く。
「全部あんたの計画通りになって、満足？」
「いやいや。こんなもので満足できるほど控えめな人間じゃないことくらい、一宮が一番わかってるだろ？」
喰えない笑みを浮かべ、限野はお守りを手に取って自分の制服のポケットへとしまった。お守りという名の餌を。
「私としたことが迂闊だった。あんたが素直に私にお守りなんてものを渡すわけがないのに」
「いやいや、ちゃーんとお守りだぜ？　死ぬほどヤバイ目には決して遭わないようになってる」
「死なない程度にヤバイ目には遭うようにしておいてよく言うわ」

限野のお守りこそが奴の言う餌だった。持ち主の元に死なない程度の危険な奇怪が寄りつくように作られた、お守りどころか敵寄せだったわけだ。
「死なないならいいじゃんか。結果として一宮の記憶も少しは戻ったわけだし」
いけしゃあしゃあと言ってくれる。
「それに俺だってちゃんと敵寄せしたぜ？　そこそこに危なっかしい奴。この一ヶ月に何度死にそうになったことか」
大仰に肩を竦めてみせるけど、それが余計に嘘っぽい。
「それはそれは。おかげで随分魔術の扱いにも慣れてきたじゃない。ゴーレムを創作して遠隔操作で私を襲わせる程度には」
限野は薄らと笑った。今さら否定する気なんてないだろう。私がもう理解していることくらい、こいつだって理解しているのだから。
餌を撒くことにしたと宣言されたあの日、奇怪な影と遭遇した時には私は既に限野の手の内で踊っていた。お守りという名の敵寄せ装置を私が持つことになったのも、一ヶ月もの間奇怪な現象に遭遇し続けたことも、今日ゴーレム相手に右往左往することになったのも、今こうしてお互い向かい合って座っていることも、みんなみんな限野のシナリオ通りというわけだ。
腹立たしいけれどこいつはそういう人間で、結果として今現在私はここにいるのだから、私としても結果オーライなわけだけど。
「この一ヶ月、随分色々な奇怪に遭遇したけれど、あのゴーレムだけは限野が仕向けてくれたんだものね？　わざわざ私の帰り道一帯を人払いするような魔術まで使って。他の誰でもない、あんたが」
睨みつけてみても限野はどこ吹く風だ。客観的に見るとよくわかる。本当に何て嫌な奴だろう。私がこういう性格なのだから限野はそういう性格で当然なのだけど。
ひとつ息を吐いて私は仕切り直すように口を開いた。
「それにしても、あんな重量のゴーレムに押しつぶされでもしたら危うく死んでいたかもしれないんだけど」

「死なないようにはちゃんとプログラムしたって」
「あれはプログラムだったわけ？　魔術の類じゃないんだ？」
「そ。ほら」
　にこやかに限野が見せたのはあの最新スマートフォンだ。その画面にはアルファベットと数字、記号による無数の文字列。
「プログラミング言語？」
　入学式以降、会うといつも携帯をいじっているなとは思っていたら、あれはこのプログラムを組んでいたわけだったのか。思えば、その頃からこいつは私を嵌めるべく動いていたということになる。しかも嵌める当人である私の真横で。
　つくづく迂闊だったとは思うけど今さら考えても仕方がない。話を進めよう。
「でもゴーレムに組み込んだから魔術と併用させられたってことでしょ？　どの言語使ったの？　私は工学系って疎いからよく知らないけど、Ｃ言語だとかＪａｖａだとか？」
「いや。俺の開発した言語。ふつうのプログラミング言語に魔術対応なんてないからなー。自分のやりやすいように作った。とは言え随分時間がかかったけどな、数年単位。制御工学だの情報工学に触れるのは今回が初めてだし。二、三百年もタイムラグがあるとやっぱ埋めるのに時間がかかるな」
「私は今回そういう系統ってさっぱり。どちらかと言うと文系に偏っている」
「俺はどっちかっつーと理系だからバランス取れていいじゃん」
「まぁね」
「しっかしこうして一宮もけっこう思い出したし、苦労してゴーレム創った甲斐があったなー」
　満足げに言いながら限野は伸びをした。
「でも昔あれだけやった魔術系統に向かない体質ってのは誤算だった。あの程度のゴーレムの作成にも随分手間がかかったんだぜ？」
「わざわざ金に変換したゴーレムなんて創っておいてよく言う」

ゴーレムは本来、土人形だ。
だけど私を狙ってきたあのゴーレムは金だった。金メッキではなく全身純金製の。見たわけではないけれどわかる。あれはわざわざ土を金へと変えたものだ。いわゆる錬金術によって。
「前だってそれなりに苦労してあれだけの容量のゴーレムを金に変えられるようになったと思っていたけど」
「俺は苦しく労働したことなんてないから。努力はするけどな」
まぁ確かに。努力を苦しいと思わなければ、それは苦労とは言わないのかもしれない。結局のところ楽しんで学び、研究していたわけだから確かにあれは苦労ではないか。
カバラも錬金術も、魔術と呼ばれる様々な知識も、占星術も呪術も妖術も医学も哲学も神智学も化学も語学も。知りたいという知識欲のままに貪欲に学んだ。そこには苦痛など存在せず、新たな知識を得る歓びだけがあった。
限野は今もそれは変わってはいないようだけど。今回のゴーレムやらには随分手間暇をかけたようだし。あの容量のゴーレムを作成し、金に変えたのだからそれなりに面倒なプロセスを踏んだのだろうし。
「ってそうだ、忘れていた。私は請求に来たんだった」
「請求？」
限野は何のことだとばかりに首を傾げる。
「クリーニング代よ、クリーニング代。あんたのゴーレムのおかげで制服も靴もバッグも目も当てられないくらいドロドロになったじゃない」
「ん？　ドロドロってどこが？　て言うか制服は？」
「これは着替えてきたの。一度家に帰って。あんなひどい格好一秒だって早く脱したかったから」
一度帰宅してシャワーを浴びて着替え、もう一度駅前まで出てきたのだ。酷い手間だった。
すると限野はきょとんとした顔で言った。

「別に泥だらけでもいいじゃん。どうせ今この一帯で俺以外の誰かに会うことなんてないし。つーか、やけに遅いなと思ったら着替えに帰ってたのかよ。おかげで俺はずーっとゲームしてるしかなかったじゃないかよ」
「限野が勝手に待っていたんでしょ。だいたい約束も何もなしによく私がここに来る気でいたものだよね」
「ん、そりゃあゴーレムがぶっ壊された時、一宮が色々思い出したなーってのが俺にも何となくわかったから。じゃあ町が人払いされてるのも、俺がやったって気付いて会いに来るだろうなーと」
「嫌だ、何で限野に私のことがわかるかな。気色悪い」
心底の言葉に限野が口を尖らせる。
「気色悪いはないだろ。ひっでーな。俺の繊細なハートは見るも無残にズタズタだ」
「繊細って意味を間違えて覚えたの？」
「……何で一宮はそんなに毒々しい言葉ばかり口から出てくるんだろうなぁ。仕方ないか、俺があまりに善良極まりないし」
「じゃあ自称善良の限野はさっさと人払いしたこの町をなんとかしてくれない？　泥まみれの姿をご近所や家族にも見られずにすんだのはよかったけど、これじゃあゴーストタウンじゃない」
「せっかく苦労してこんな大規模に人払いしたのに」
あからさまに不満げだけれどそんなことは知ったことじゃない。
「さっき苦労なんてしたことないって言ったのはどの口？」
「たった今、ああやっぱりあれは苦労だったなと認知したんだよ」
そう言ってわざとらしく肩を竦めてみせたけど、飽きたのかそっぽを向いて「でも腹減ってきたなぁ」などとほざきだした。
「それじゃあ一宮もうるさいし、そろそろ帰るか」
「その自己中心的な性格はもう犯罪だよね。客観的に見れば見るほど思う」
「客観的に見ると一宮の毒舌は凶器だよな」
「黙れ。自己中で人様のペースを乱すよりはマシだから」

「その毒舌でこれからどれだけの人間のハートを抉ってくんだろうな？」
言い返したかったと言えば言い返したかったけど、これ以上は不毛な争いでしかないのでお互いそれ以上は言わなかった。こうなったら諦めてなかったことにして水に流すのが懸命だ。
「あーそうだ」
先に沈黙を破ったのは限野だった。
「帰るより先に聞かせろよ。それで一宮、自力で思い出してどう思った？」
まったく笑っていな目に形だけの笑顔で限野はじっと私の顔を覗きこんできた。
触れるほどではないけれど、間近にある限野の顔を見て奇妙な感覚を覚えながら私は答えた。
「そう言えばそういうことにしたんだった。それが最初の感想」
「最初ってことは次もあんの？」
「あるね」
「ふぅん。じゃあ次の感想ってのは？」
にやにやと笑みを浮かべる限野に、こちらも笑って答えてやった。
「私とあんたが元は同じ人間だったなんて、気色悪くて死にそう」
限野はおかしそうに声を上げて笑った。
「全く同感だ」？

エピローグ

「平和だわ」
「ボケそうなくらいにな」
今日も私と限野は何となく一緒に下校していた。特に示し合わせたわけでもないのに、いつも廊下や校門を得たあたりで出くわして一緒に帰ることになる。
「これと言うのも一宮が全部追っ払ったからだ」
限野が恨みがましい目を向けてきたけれど気にしない。
「あんなに毎日毎日面倒に追われたら鬱陶しいじゃない」
ゴーレム騒動から既にひと月以上経ち、この間入学したばかりだった高校はもうじき夏休みに入る。
あのゴーレム騒動の後、入学式の日に突然思い出した記憶が自分のものだと認識できるようになり、実際にその光景を目にしていた頃の氏素性も思い出した。
そうして前世と今を生きる自分が確実に繋がった私はまず、毎日飽きもせずにやってくる奇怪をどうにかすることから始めた。私と限野は二人でワンセットという扱いになっているので、私一人どうこうしても仕方ないと思い、私と限野二人分、厄介そうな連中から逃れるための目くらましを仕掛けてみた。それが案外うまく作用したようで最近はごくごく普通の高校生生活を送ることができている。平和で何よりだと思うのに、限野はそれが不満らしい。
「実践のほうが勘も取り戻しやすくていいじゃんかよ。あーあ、退屈退屈」
「その気になれば思い出したてで慣れない私の目くらましなんてすぐに破れるだろうに、それすらできないような連中を相手にして勘なんて戻るの？」
「退屈しのぎにはなったのに」
完全に不貞腐れた顔で限野は言う。

「思い出した途端に完全に姿くらますなんて、なーんで一宮はそんなに逃げ腰なんだよ。逃げも隠れもしすぎだろ」
「面倒臭いんだからいいじゃない。まだこっちは思い出したてで本調子じゃないんだから。もう少し調子を取り戻すまでは学生生活を謳歌したっていいじゃない」
「俺はもう学校飽きた。ひたすら教科書読んで記憶して。それだけじゃんかよ。あーあ、せめて大学だったらなぁ」
「アメリカにでも行って飛び級すれば？」
「アメリカ行ったら一宮の観察ができなくなるだろ。一宮もアメリカに行くなら俺も行くけど」
「だから観察するなって何度も言っているじゃない」
　すると限野は呆れ顔で息を吐いた。
「そうは言ってもだな、俺たちはそのために今回こうしてるってのもあるんだぜ？　ものすごーく手間をかけて」
「……気の迷いだった。すごく不快」
「俺は面白いけどなー」
　楽しげに笑う限野を見れば、ますます私は渋面になるばかり。
「客観的に見て初めて気付いた。まさか自分がここまで軽佻浮薄な人間だったなんて」
「軽佻浮薄とは言いすぎじゃないか？　一宮は自虐思考だよな。本当に俺？」
「私は私。限野ではない。私を限野の一部のように言われるのは不本意甚だしい」
「だって一宮は俺だろ？」
「違う。限野が私の一部」
「て言うか、俺達は一応きれいに二分割したんだから別にもう何でもいいじゃんか」
「俺達って言わないでよ。それじゃあ私が付属品みたいじゃない」
「そんなにこだわるなよ。面倒臭ぇ」
「じゃあ私達にしてよ。それなら私も納得するから」

「いや、それじゃあ俺が付属品だろ。どれだけ俺の存在を蔑ろにする気だよ」
「限野はそういうのにこだわるのは面倒臭いんでしょ？　なら別にいいじゃない」
「面倒臭いけど、そんなあからさまに下位に置かれるのは嫌だ」
歩みを止めてしばらく二人、無言で軽く睨み合った。
私と限野は前世で同一人物だった。前世の前世も、そのまた前世も。前回……三百年ほど前に死ぬまでは、何度死んで生まれ変わっても私と限野は一人の人間だった。
私達は……いや、私「達」というのも変か。別に複数の人格があったわけでもない一人の人間だったのだし、だからと言って「私」だと今現在の一宮棗一人を語っているようだし、「俺」だと限野一人のことのようになるので却下。私と限野、二人を足して一人なのだからどちらかに偏るのはどうもしっくりこない。
そうだ。それじゃあこれから、前回までは一個人だった私と限野について語る時は「僕」という一人称を使うことにしよう。一宮棗は「私」、限野冬季は「俺」。そして私と俺になる前の一人の人間は「僕」。
我ながらよい考えの気がする。
「よし。じゃあ前回までについては、私でも限野でもないものとして扱おう」
「唐突に何だよ？　俺でも一宮でもあるのが前回までだろ？」
「紛らわしい。だから前回までについて語る時は私も限野も一人称を「僕」に統一してはどうかと思う。私でも俺でもない、だから僕」
「前回までに僕なんて一人称使ったっけかぁ？」
「忘れた。そもそも日本に生まれたこと自体久しぶりだし。いいじゃないよ、せっかく日本はたくさん一人称があるんだからわかりやすくて」
「僕なぁ、僕。滅多に使わないから何か気色悪いなぁ」
限野は難しい顔をして首を捻った。

「文句あるなら別のでもいいけど。儂、妾、拙者、朕、某、小生、我が輩、麻呂……たくさんあるから好きなものを選べばいいわ」
胸を張ってそう言うと限野はうんざりとした顔をした。
「何でそんな一般的でないのばかり選ぶんだよ」
「なら限野が決めたら？　私でも俺でもない一般的な一人称」
「だから俺は今回、文系は得意ではないんだって」
そう言って限野はわざとらしく息を吐き、まだ若干不満そうだったけれど最終的には合意を得た。そういうわけで、これから前回までについて語る時の一人称は僕に統一する。

今から約二百年前、僕は死んだ。死んで生まれ変わって、それを繰り返して僕は僕として、長い長い時間を生きてきた。何度も何度も生まれ変わり様々な時代、国を、幾人もの人間として生きてきた。根本的な中身は僕だったのだけど、当然一度死んだ人間はそれで終わりだから名前も性別も違う新たな人間として生まれ変わった。僕という人間の記憶と魂を持ったまま。まるで長い旅のように終わりなく、当てもなく、生と死を繰り返して長い時を過ごした。
それらは全て、知りたいことを余すことなく知るために。
そのために僕はもう途方もない昔から生きて死んでを繰り返している。この尽きることのない知識欲を満たすために。
だけど前回、僕は考えた。
このまま行けば、いくら生を繰り返しても恐らく僕は全て知ることは出来ない。この知ったそばから新たに知りたい欲求が生まれる僕のことだ。きっとこの星の寿命のほうが早く訪れるだろう。
そして思い至る。
一人よりも二人のほうが、効率が良いだろう。
それから僕は、自分という人間の魂を二つに分けて転生することにした。同じような二人になってしまっては得られる経験は少ないだろうから、二人の僕は少しずつ違う人間になるように。僕の感情も性質も才能も、二等分するのではなくあくまで二分割しよう。少

しずつ異なる要素を持った人間が二人出来上がるように。そうすれば僕という人間をもう一人の僕が客観的に見ることできる。僕という人間をより詳細に観察することができる。

ああ、でも記憶だけはそれぞれに確実に受け継がせなければ。そうでなければ次に生まれた二分の一の僕が今の僕を思い出せないかもしれない。それでは意味がない。

その辺もうまく調整しなくては。魂をいじろうと試みたのはいつ以来だろう。何としても完璧な形で生まれ変わりたいものだったが、けどその前に前回の僕の体が寿命を迎えてしまった。

そして私は前世の記憶を思い出すこともなく、十五年を過ごすことになったわけだ。

幸い、僕を分け合ったもう一人である限野と接触することで少しずつ思い出すことになり、やや乱暴な手段だったけれどそれまでのほぼ全ての記憶を思い出すことができた。

「で、実験的とも言える転生も一応成功したって考えてもいいものかな」

「んーまぁ半成功？　失敗ではないんじゃね？　一宮も一応思い出したし。でも転生に三百年もかかったなんて初めてだからその辺は要改善だな。最初の頃だってそんなに空かなかったつーの」

確かに、僕はありえない頻度で転生を繰り返してきた。あまりに何度も何度も繰り返してきたため、一体何人の人間としての生を過ごしたのか正確には思い出せないくらいに。

いくら時間があっても足りないと思っていたから、死んだそばから転生の準備に入っていた。だから一度死んで、次に生まれ変わるまでにそう長い時間はかからなかったのだけど。

「ひとつの魂を二分割して、どういう家系に生まれて、って細かく設定したし時間がかかるのは想定内じゃない。時間はかかっても成功と言える形で転生できただけでも御の字でしょ。失敗していたら私も限野も今生なんてなかったかもしれないし」

「うん、まぁなー。魂が使いものにならなくなっちゃったらさすがにどうしようもないもんな」
限野は呑気に笑うけれど、実際こうして辛うじて成功と言える現状を迎えているのは奇跡のような確率だったと思う。魂を二分割して同時代に生まれ変わろうなんて、我ながら本当によくそんなことを思いついたものだ。成功する確率なんてほとんどなかったのに、その少ない確率に賭けた自分も自分だけれど。
「思えば僕は生きることを楽しみ過ぎだっただろうと、最近ちょっと思う。限野を見て余計そう思う」
「そりゃあ楽しいに越したことはないだろうよ？　そんな辛気臭く生きてどうするんだよ、人として生きる貴重な時間をさ」
「限野が言うと真剣みに欠けるからただの極楽蜻蛉にしか聞こえないから不思議」
「何だよ、一宮なんかそんな仏頂面ばっかして。世界終焉のお知らせでもする人かよ」
「限野を見ていると、少し真面目に生きなければと思うんだよね」
「俺は一宮を見てると、もっと楽しく生きようと思う」
「あんたは楽しみすぎ。もう少し慎重に生きなよ」
「いいじゃん。一宮が俺のストッパーになればさ」
「じゃあ私はあんたが羽目を外してくれるからいいよ」
「ああ、そっか」
「そうだよ」
しかし最初から思ってはいたけれど不思議な気分だ。同じなのに違う人間を目の前にするというのも。
元は同一だったのに今はそれぞれ別個の存在。一卵性双生児みたいなものだろうか。姿かたちも性質もまるで違うけれど。
「そう言えば私はこの間思い出すまで、前世に縁があったらしい相手が同じ時代に生まれていて、再会するなんて、何かものすごい意味があるのかと思ってたんだよね」
すると限野は軽く噴き出した。

「一宮ってロマンチストだよな。僕にもロマンチストの素養が少しはあったってことか。これまた新発見」
「だって前世で縁があったらしい相手と偶然同じ高校に通うことになって。しかも私はは全然と言っていいくらい覚えてないのに、もう限野はほぼ全部覚えていて。その上、限野は何だか私が思い出すか思い出さないかに随分興味を持って、わざわざあんな回りくどい真似までして私にほぼ強引に思い出せようとしたんだから。何か大層な意味でもあるんじゃないかって勘繰ったって仕方ないじゃない」
「まぁ、思春期だもんなー。自分が特別だと思いたがっても仕方ねぇって。そういう時期だもんなー」
あからさまに小馬鹿にするように頭を撫でてきた手を払う。
「うるさい。そう思った一番の原因はあんたにあるんだからね」
「俺は俺がやりたいようにしかやらないから」
さわやかな笑顔で利己的なことを言ってのける。ああ、本当に僕は性格が悪かったのか。こんなにも自己中心的で他人を顧みなかったなんて……。
「蓋を開けたらこんなに意味のないことだったなんて。全部自分のために生まれ変わって、実験的に魂を分けてみたりして、それもその場のノリのような気分で」
「だーから一宮は全ての行動に意味を持たせないと気が済まないタイプなのかって驚いたんだよな。僕にそんな要素はないと思ってた。俺もないし。ところがないようであったんだなーと一宮を見て初めて気付いたよ」
「客観的に自分を見て楽しい？」
すると限野は満面の笑みで答えた。
「すっげー楽しくて面白い」
「……私は何とも言えない気分」
確かに前回まで僕はほぼ、現在の限野のような皮肉屋の楽しがりだった。だから僕に私のような性質があったというのは少し意外だけれど、一応僕も人間なんだから二面性があったっておかしくない。

それを自覚してはいなかったけれど、確かに今回二人に別れて転生したことでそういう面が見えたのも面白いと言えば面白いだろう。その自覚なかった面を受け継いだ私としては微妙な気分だけれど。
「そんなしけた面するなって。コント・ド・サン・ジェルマンともあろう者が」
「それは前に僕が死んで使い終わった名前じゃない」
「けっこう気に入ってたんだ、あの名前もあの人生も」
「まぁ僕も楽しんでいたしね。でも未練があるわけでもないんでしょ？」
「うん。だって今は限野冬季としてけっこう楽しんでるし」
「それは何より。私もせいぜい一宮棗としての人生を謳歌することにするわ……ああ、そうだ」
「んぁ？」
限野が間抜けな声を上げて私を見た。
「とりあえずお互いを観察しながら色々知って経験するっていうのが、今回わざわざ二人に分けて転生した理由だったわけだけど、これからどうする？」
「どうするって？」
「具体的に何をするか。私は特に目的意識もなく十五年生きてきたから今はまだ特に思いつかない。限野はどうするの？」
少し不思議そうな顔をしてから限野は言った。
「俺も特には決めてないけど。その時やりたいと思ったことをする気で生きてきた」
「まぁそういう風に僕は生きてきて、ここまで来ちゃった感じだけど」
そんないい加減に生きていいものだろうか。ここに至るまで随分回り道をしてしまったし、時間を無駄にするのも気が引けるし。
「だいたい前回までに気になってたことも俺が調べたり勉強したりしちゃったしさ。別に一宮にこれやってくれーってのも特にねーし。じゃあお互いあとは好きに生きてよくね？」

「……何か目的がないと無駄に過ごしちゃいそう」
「無駄も経験の一つだし、いいじゃんか」
「ああ。そういう考えもあるか」
無駄という経験をすれば、それはそれでいいのか。生きているだけで何かを経験しているのだから。それでいいか。
「じゃあ私は私のペースで好きに生きていく」
「うん。俺は俺のペースで好き放題やる」
「元同じ人間のよしみで忠告してあげる。あまり羽目を外しすぎないようにね」
「元同じ人間のよしみで忠告してやろう。一宮は少し羽目外した方がいいぜ」
自分と対話するように、他人と対話するように。
そんな奇妙な感覚を持ちながら元は自分で今は他人の二人、少し離れて歩き出した。

了

エピローグ（後書き）

灰色蝶にウロボロス、一応これで完結です。ここまでおつきあい下さりありがとうございました。内容にも特にこれといった意味もなく、タイトルも意味分からないんだけどと思われるだけのものになった気がしますが、そういう『何かよくわからない話』だったと認識していただければ幸いです。後日ブログで書ききれなかった設定などをちょこちょこ語ろうかと思っていますので、ご興味があればぜひそちらも。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7954w/

灰色蝶にウロボロス

2011年10月1日02時42分発行